

# ミュージアム 通信

特別展

## 「甦る江戸の化粧道具 —板紅—

2008/4/26～6/29開催

[資料室談議 第6回]

『都風俗化粧伝』等より抜粋・解説  
お歯黒化粧【後編】

[ミュージアム講座リポート]

江戸の贅沢—  
漆工の愉しみを再び



「豊歳五節句遊・七夕」(部分)・香蝶楼国貞・国立国会図書館所蔵

## 「甦る江戸の化粧道具—板紅—

**甦る「板紅」—復活  
プロジェクトの裏側**

かつて女性が携行した  
紅入れ「板紅」は、蒔絵や  
漆絵、螺鈿、象嵌などで多  
彩な意匠が施された趣向  
品であり、女性の懐を奥  
ゆかしく飾ったアイテム  
であった。量産された板  
紅があれば、一方で特注  
の一点物もあり、それら  
は携帯用化粧道具として  
の側面以上に、ささやか  
な奢侈を懐中に忍ばせ愉  
しんだ当時の女性の美意  
識をうかがわせるものだ。  
しかし大正以降、洋紅  
の普及に伴い和紅の需要  
が減ったことで、板紅の  
存在自体が次第に薄れて  
ゆき、いつしか知られざ  
るものとなった。今回、板  
紅の復興を企図し、特別  
展開催に至った背景には、  
「板紅」という紅文化がこ  
のまま潰えてしまうこと  
を危惧する強い気持ち  
があったからにほかならな

い。「板紅を現代に甦らせたい」、その一心が本プロジェクトを始動させたのである。

### 「蝙蝠形板紅」

さっかけとなった

しかし、今や途絶えた板紅を復活させるのは容易なことではなかった。制作を委ねた輪島・金沢の漆芸家にとって、板紅とは前例のない代物だったのだ。板紅には木製・象牙製・金属製・紙製など多種があり、その装飾は前述のとおりだが、肝心の制作工程や技法などに関する資料は一切残っていない。現物を見て、それらを推察するほか術はなかった。さらに、5cm四方という板紅の規格サイズが難易度を高めた。漆芸の世界において、小さなものほど作家の力量が問われるからだ。

そうした中、当館所蔵のある板紅が漆芸家の目

に留まった。それは、板紅の形状がその名の通り板状のものや箱形・二つ折りのものが主流を成す中で、一際斬新な意匠を持つ蝙蝠形の板紅だった。



「大判模様蒔絵蝙蝠形板紅」・江戸時代後期  
タテ約5.1cm ヨコ約4.6cm

### 江戸時代の職人の技に挑む日々

蝙蝠形板紅の概要は次のとおりだ。厚さは最も厚い部分で約1.2mm（素材そのものの厚さは0.8mm程度）、重さわずかに1.6gと軽量で、両翼は薄く削いだ麻布を張ることで繋いでいる。いわゆる「布目蝶番」を用いた板紅である。

通常、板紅の蝶番は金属

製が多く、布製で、かつこの薄さのものを反らずに塗り上げ、接合させた板紅となると非常に珍しい。あいにく制作者は不明だが、江戸後期の職人の技術の高さが垣間見える本作は、現代の漆芸家を触発するに十分なものであった。

早速、現地では布目蝶番の再現に取り掛かった。それは、試行錯誤を繰り返しては新たな問題点が目につく日々の始まりであった。問題を克服していく過程で、麻布一枚、塗り一層がどれだけの厚みを持つているのかを数値化していく作業が行われた。そうして、いつしか蝙蝠形板紅の構造に近づけようと重ねた試作品は大量になっていった。

### 試作の果てに

本プロジェクトに参加した漆芸家は総勢二十八名。内、布目蝶番の再現に

成功したのは、実にたったの二名（平澤・鳥羽両氏）だった。本来、漆芸の現場では職人同士で部材や技術の公開を行わない。しかし、今回の板紅制作では、職人が一同に江戸の技を再現することに取り組んだ経緯もあり、布目蝶番の共有が成された。その結果、布目蝶番を用いた板紅が計十五点完成するに至った。このほか、箱形や二つ折りなどの主流な形に沿って作られた板紅も多数完成し、本プロジェクトを通じて五十四点の板紅が甦ったのであった。

### 選ばれた「現代の板紅」

本展開催に先立ち、都内某所で有識者数名による板紅審査会が行われた。今回制作された板紅の中、グランプリに相応しいと選ばれた作品は、図らずも布目蝶番を再現した平澤氏の「風切羽（蒔絵）」であった。

### 最後に……

板紅という形を介して、「漆」と「紅」の新たな魅力と可能性を示した本企画が、伝統文化の継承の一助となることを願う。



「風切羽（蒔絵）」「腹合せの鯛」・平澤公祥作



「黄揚羽板紅」・鳥羽雅哉作

## 『都風俗化粧伝』等より抜粋・解説

## お歯黒化粧〔後編〕



お歯黒の原料は、沸かした「お歯黒水」と「五倍子粉(ふしのこ)」で、これらを交互に歯に付けることで黒く染めていった。色むらがなく、板を並べたように隙間なく歯の並ぶ様が、口元美人とされた。

## 従

来、江戸では「お歯黒※1をして半元服、眉を剃り落として本元服」と言ったもので、女性は結婚が決まると歯を染め、出産を機に眉を剃ったとされる。つまり、お歯黒化粧によってその女性が未婚か既婚かを見分けることができ、また職業やおよその年齢も読み取れたのである。

しかし、厳密にすべての女性が結婚を機にお歯黒を始めたのかというと必ずしもそうだったとは言えないようである。

江戸時代末期の京阪・江戸間における市井の行事や風俗の相違を記した『守貞漫稿』では、当時の女性のお歯黒状況を次のように述べている。

【京阪の女性のお歯黒について】  
①二〇歳になると未婚であっても歯を染める者が多い。  
②二十一、二歳になれば未婚・既婚者問わずお歯黒をしている。  
③遊女・芸子ともに歯を染めている。  
【江戸の女性のお歯黒について】

①二〇歳以下かつ未婚であっても歯を染める者が多い。  
②吉原では遊女のみ歯を染めている。  
③岡場※2所の私娼や芸者は歯を染めず、年老いても白い歯のままである。

このように、一口にお歯黒と言っても、地域によって多少の違いがあったようだ。また、同書には武家の侍女について、「十六、七歳になれば未婚であっても皆必ず歯を染め、かつ眉も剃り落とした」と書かれている。

長く続いたお歯黒という慣習が政府によって改められたのは、明治三年のことであった。華族に対し、お歯黒の禁止令が發布されたのである。だ

が、古い因習はすぐには止まなかった。そもそもお歯黒という風習が長く行われていた理由のひとつに、お歯黒の原料である五倍子粉の主成分タンニンが、虫歯や歯槽膿漏を予防する効能があったことが指摘されている。お歯黒は歯の健康上、たいへん優れた化粧だったのである。

結局、お歯黒が一般的に行われなくなるのは、皇后が率先してお歯黒を止めることをアピールした明治六年以降のこととなる。

※1 京阪では歯を染め、眉を剃ることを「顔を直す」あるいは「顔を直る」といった。  
※2 官許の吉原(京では島原)に対し、深川・品川・新宿・板橋などの私娼が集う歓楽街を「岡場所」といった。「岡」とは「局外」や「傍ら」、「脇」などを意味し、そこから転じて「非公認の意味で用いられた言葉」。



「江戸姿八契」(部分)・歌川国貞・国立国会図書館所蔵



『江戸の贅沢——漆工の愉しみを再び』二〇〇八年五月十日開催  
伊勢半本店 紅ミュージアムでは、特別展の会期中、漆の知識を深める講座を開催。  
多彩な話で好評を得た金沢学院大学 山崎達文教授の講座をご紹介します。

講師の金沢学院大学美術  
文化学部の山崎達文教授は、  
本展開催にあたり板紅を出  
品する漆芸家の紹介をはじ  
め、図録の執筆及び展示パ  
ネルの監修をしていただいた  
た陰の立役者です。本講座  
では、「江戸時代と現代を対  
比し、「漆工の愉しみ方」に  
ついてお話いただきました。

まずは講座の前半に、漆  
の特性や歴史、生活の中  
で  
どんな使われ方をしてきた  
かなどの基礎知識や「漆工  
と漆芸の違いとは?」「美  
術と工芸の違いとは?」「近  
代の美意識と工芸」といっ  
た概念的な話を楽しい余談  
を挟みながらしてくださ  
いました。「美術のガイドラ  
イ  
ンは決まっておらず、漆器  
や焼き物などの工芸が、絵  
画などの美術より格下とい  
うことではない。現代の人は、  
作る側も所有する側も美術  
や工芸といった概念に捉わ  
れすぎています。江戸時代の  
人のように『いい物はいい』  
といった自分の価値観で判  
断すればいいのではないか』  
というお話に受講者の方も  
頷いていらつしやいました。

そして講座の後半は、江  
戸時代から現代までの漆工  
作品数点を例に挙げ、見所  
や技法を解説いただくこと  
もに、江戸時代の「オーダー  
メイド文化」についてお話  
いただきました。「江戸時代  
の人は、人と同じ物を持ち  
たがらず、例えば板紅や簪  
といった装飾品を、オーダー  
メイドする傾向があった。  
普段の生活は質素にしてて  
も、自分の趣向を反映させ  
た品を長く大事に使ったの  
だ。職人の精緻な技が施さ  
れた工芸品を、仲間内で見  
せあつては愉しんだのであ  
ろう。現代も江戸時代のよ  
うなオーダーメイドシステム  
を構築することで、工芸の  
世界が活気づくのではない  
か」と山崎教授はおつしや  
います。

日常生活の中で漆器を使  
う習慣が減少している現代  
社会において、本展の「板紅」  
が「漆工の愉しみ」を再発見  
する機会となれば幸いです。

Information

かわら版



■「甦る江戸の化粧道具—板紅」販売会

特別展終了後、板紅作品(一部)を期間限定で販売いたします。輪島・金沢で活躍する28名の漆芸家が高度な技術を注いで制作した板紅は、形状やデザインが異なる一点物。この機会にぜひお求めください。

日時:2008年7月4日(金)~6日(日) 4日午後2時~8時/5日・6日午後12時~6時  
会場:伊勢半本店 紅ミュージアム

※詳細は、ホームページをご覧ください。

Since 1825

伊勢半本店  ミュージアムのご案内

●開館時間/午前11時~午後7時 ●休館日/毎週月曜日 ●入場無料  
(月曜日が祝日または振替休日の場合は、翌日が休館日となります)

東京都港区南青山6-6-20 K's南青山ビル1F TEL&FAX:03-5467-3735  
東京メトロ銀座線・千代田線・半蔵門線「表参道」下車B1出口より徒歩12分

<http://www.isehan.co.jp>